コーディネーターだより

令和８年４月
八代市立八代支援学校
文責　楮木

特別支援教育コーディネーターの楮木です。今年度より、前任の橋本先生からバトンを受け継ぎ、本校の特別支援教育コーディネーターを務めることになりました。今年度も「コーディネーターだより」を通して、保護者の皆様に情報発信をしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

【インクルーシブ教育について】

最近「インクルーシブ」という言葉を、様々な場面で見たり聞いたりすることができるようになりました。例えば、「インクルーシブデザイン」、「インクルーシブ遊具」、「インクルーシブスポーツ」などがあります（参考動画は QR コードより視聴いただけます）。この「インクルーシブ」という言葉は、2006（平成 18）年 12 月 13 日に国連総会において採択された「障害者の権利に関する条約第24条（教育分野）」の条文で次のように用いられ、以下のように記されています。

参考動画
RKK NEWS より

> 1.（前略）・・・あらゆる段階における障害者を包容する教育制度及び生涯学習を確保する。
> 2. 障害者が障害を理由として教育制度一般から排除されないこと・・・（後略）」

この下線部分こそが、「an inclusive education system」と記されているのです（和訳：文部科学省）。

また、「インクルーシブ教育」は「ゴール」と捉えるのではなく、その未来に向かって私たちが歩み続ける「プロセス（道のり）」を示しています（“Inclusion is a journey, not a destination”）。さらに、インクルーシブ教育の原点とされる「サラマンカ宣言（1994）」では、「挑戦（“Challenge”）」とも記されています。

【インクルーシブ教育システムの構築に向けて】

2012 年に文科省は、次のような報告文を発表しました。

> インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、（中略）通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある学びの場を用意しておくことが必要である。
> 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」より

文科省は「インクルーシブ教育システム」としてこれらの学びの場を「一つの連続した学び」の仕組みとして位置付けており、特別支援教育で培ってきた専門性を全ての場で活かし、一人一人のニーズに合わせて柔軟に行き来できるような環境を整える。その積み重ねの先に「インクルーシブ教育」の実現がある、と捉えています。

【インクルーシブ教育の2つの重要な視点】

「インクルーシブ教育」においては、「共生社会」と「誰一人取り残さない（排除しない）」の2つの視点がとても重要です。注意したいのは、「一緒でなければいけない」のではありません。単に場を共にするだけだと、「ダンピング（手立てのない投げ入れ）」の状況を生じさせ、さらなる分断につながるリスクもあります。

参考動画で紹介されていた「みんなのあそびば」の看板には、「多様性を自然に受け入れ」「一緒に楽しめる工夫を考えよう」「手伝えることがないか聞いてみよう」という、遊具を利用するすべての人を温かく包容する言葉が記され、解説者の「共に開発をして・・・新たな価値を作る」という言葉には、共生社会の姿が表されていたように思います。大切なことは、「インクルーシブ教育」実現の途上に立つ私たちが、「共生社会」と「誰一人取り残さない（排除しない）」2つの視点を見失うことなく、みんなで「挑戦の歩み」を止めないことだと考えます。

具体的には、周囲の人々の「挑戦」とは、人的・物的・制度的な障壁を取り除き、一人一人を温かく包み込むこと。そして、当事者にとっての「挑戦（＝「努力として」ではなく「権利の行使者として」の意味で）」とは、一人一人の力に応じて、自らの意思や思いを安心して表明することだと考えます。もちろん、意思の表明が難しい場面では、その小さなサインを周りが受け止め、対話を重ねることが必要です。「共生社会」の実現に向け、双方の「挑戦の歩み」こそ、インクルーシブ教育の真髄だと思います。そして、その「挑戦」の場や機会の鍵となるのが、「連続性のある学びの場」と「交流および共同学習」です。

【キーワード】

包容（包摂）、共生社会、誰一人取り残さない、挑戦の歩み、意思の表明、対話、交流および共同学習